・書　評・

吉田　忠著

『畜産経済の流通構造』

ミネルヴァ書房刊　一九七四年　二二六頁

千葉燎郎

一

私は、『本誌』第二七巻第二号（一九七三年四月刊）で、吉田寛一氏編著の『畜産物市場と流通機構』（一九七二年八月、農山漁村文化協会刊）を紹介し、その批評を試みた。その後、吉田忠氏が、同書に載せられた三編の論文を中心に、これにその前後に発表された論稿を加えて、表記の『畜産経済の流通構造』を刊行されたので、併せてそれを紹介し簡単に批評を試みておきたい。

まず、本書の目次を掲げてみよう。

はしがき

第一章　ブロイラーの生産・流通の展開

第二章　ブロイラーの生産・流通の現状

第三章　鶏卵の生産・流通の展開と現状

第四章　インテグレーションと巨大商社の農業進出

第五章　養鶏の危機とインテグレーション

第六章　わが国畜産をめぐる国際環境

この目次から明らかなように、本書が取りあげる分析の主たる対象は、ブロイラー・鶏卵などの養鶏産業における生産・流通の展開と現状であり、とくにこの部門で顕著に進みつつある巨大商社のインテグレーションのありようと、それがもたらす矛盾の展開の方向である。しかし、本書が把握をめざすものは、たんに養鶏産業における生産・流通の構造それ自体にとどまるのではなく、まさにわが国畜産経済の展開に内在する基本的構造の特質であり、またそのなかでの流通の展開が生みだす矛盾の本質といったものにほかならない。そのことは、本書を読みすすむうちにしだいに鮮明になってゆき、読み終わるころには読者の頭のなかに、現代におけるわが国畜産経済の展開の基本的なメカニズムが、おおよそイメージされるという形で実証されるにちがいない。そして、本書の『畜産経済の流通構造』という表題が意味するところも理解されるはずである。著者のなみなみならぬ力量を示すものといってよい。

こうした本書のメリットを生みだした要件としては、つぎのような諸点があげられよう。まず第一に、本書が具体的対象として取りあげた養鶏産業という部門が、著者自身も「はしがき」でいう通り、わが国畜産経済の構造的特質をもっとも「典型的」に表す部門であったことである。この点についてはあとでもっと具体的にふれることにするが、たまたま著者が調査研究の対象として深くかかわることになった部門が、こうした性格の養鶏産業であったことが、本書を生みだす第一の契機になっている。

第二には、著者のじつに丹念な「足で歩いた」調査にもとづく、正確な事実認識である。著者はこれを「こけの一心」といっているが、このような小まめな事実把握のつみかさねが、それらをつらぬく生産・流通関係の本質の推理にあたって、その分析をどれほど説得的なものにし、その論理構成をどれだけ力あるものにしているかしれない。

第三には、こうした分析・推論にあたっての、著者の理論的骨組みの強さと太さである。これによって、調査にもとづく事実関係が幅広く整理され、それらの上に適確な論理構造が組みあげられているのが、本書のつよみであろう。それらの点について、以下内容の紹介にわたりながら、評者の見るところを述べることにしたい。

二

わが国における鶏肉の生産と消費は、一九五七～五八年ごろから増加しはじめるが、一九六〇年以降その増加は急ピッチになり、六五年からさらに加速する。これは、食肉消費が全体として大幅に増加するなかで、牛肉供給の減退を鶏肉が代位したためといわれる。

第一章は、まずこうした鶏肉生産・消費の増大過程での流通の展開を概観したのち、そこでの生産・流通関係の変化を解明する三つの課題を設定している。第一、限定された形態の生産と消費を結びつけるものでしかなかった、一九五五年ごろまでの〝かしわの流通機構〟を明らかにしておくこと。第二、一九六〇年ごろから本格化したブロイラーの新しい産地形成、産地問屋の成立と新しい契約生産の開始、それと同時に水産資本や巨大商社等がこの分野に介入しはじめた、その過程の解明。第三、飼料と素びなを手中にして生産過程を把握した巨大商社が、また輸入ブロイラーをてこにして消費地鶏肉商をも配下におさめようとする、いわゆる商社インテグレーション構想の分析・解明、である。

著者は、こうした課題設定の基本視点として、まず「われわれは、栄養価の高い美味な鶏肉の低廉な供給と、安定した高収

益をもたらす経営部門の確立を両立させることを第一次目標とし」ながら、ここで「基本的には日本経済の発展が農業と国民生活に及ぼす影響によって規定され、より直接的にはブロイラー生産構造と鶏肉消費形態に規定される流通機構の展開そのものを理論的にとらえること」をめざすとしている（同書一三～一四頁）。

そして、「このような視点から問題をみるとき、われわれは日本経済のもつ国際的契機がブロイラーの流通機構に及ぼす影響を見落としてはならない。ここでは、ほとんどの原料をアメリカ産のトウモロコシ、マイロにあおぐ飼料、高いロイヤリティを払って導入した原種鶏から生産される素びな、そしてブロイラーそのものの輸入等々で、わが国のブロイラー産業は、アメリカに深く結びつけられている。両者の関連の結節点に巨大商社が位置する。この点を看過してブロイラー流通機構の展開をみようとすれば、おそらく基本的様相を見失うことになるであろう」（一四頁）と指摘する。こうした国際的関連性は、ブロイラーはもとより、採卵をふくむ養鶏産業を「典型」としながら、養豚・肉牛・酪農にも多かれ少なかれ共通するわが国畜産経済の基本的性格であって、著者のこの観点が本書をつらぬく基本的なモチーフになっているとみてよい。

第一章では、つづいてブロイラー流通分析のための方法論が検討される。著者は、美土路達雄氏および御園喜博氏（とくに後者）の農産物市場類型論を批判的に検討したうえ、それが「ブロイラー流通の豊富な現実をいささか希薄化ないし空虚化する」理論であって、これは、農産物市場における「〝原基的形態〟としての前期的商人がまず資本によって排除され、さらに国家独占資本主義のもとにおいては、国家の介入と規制によって市場全体がつつみ込まれていくという理論設定において、中小資本や小商品生産の把握も含めた資本の運動法則が内的要因として正しく位置づけられず、前期的商人や国家の規制というものが一面化されて主要な要因とされているところに起因する」としている（一九頁）。

そして、「ブロイラー流通の背後には、経済発展、すなわち独占資本の介入のもとでの商業的農業の進展と小商品生産の分解、流通を担う中小資本・家族経営に対する独占資本の働きかけ、独占資本間の激しい競争とアメリカへの従属関係等々が資本の運動として存在している。また消費の水準や形態も、労働力の再生産過程として資本によって規定されている。このような基盤のうえにブロイラーの流通機構とその機能の展開は進み、さらにその一形態として流通に対する独占資本に従属した国家の介入規制も進む。このような基盤との関連において、ブロイラー流通の展開を段階的にとらえようとするのが」（一九頁）、

著者の方法である。

ここにもあらわれているように、著者と御園氏との間には、国家独占資本主義段階の農産物市場をめぐる独占資本と国家との相互関係について理解の仕方に差異があり、現段階の農産物市場問題にふれた評者もふくめて議論が行なわれている。農産物・食料市場の把握をめぐって、関連個別独占と国家、総（独占）資本と国家といった諸関係がどうかかわりあうのか、そのへんを理論的に整理することが論点だと思われるが、その点はまた政策論にかかわってくることになる。

三

以上のように基本視点、課題設定、方法論をさだめたうえで、第一章では、旧来のかしわ流通とその変質（第二節）、ブロイラー生産の本格化と産地問屋の成立（第三節）、インテグレーションの進展とブロイラー流通機構（第四節）と、三つの設定課題にそった綿密な実証分析を進めている。ここで明らかにされたことは、まず第一に、かしわ流通段階の担い手は消費地の大手鶏肉商であって、卸・小売りを兼ね、特定の顧客を中心に一種の地域的独占を形成していたこと。生産は大都市近郊農家の副業的飼育による採卵鶏のひな鑑別後の抜き雄利用で、仲買人を通じてかあるいは直接に消費地鶏肉商と特約を結び、生鳥で出荷していたこと、などである。

やがて消費量の増大、消費形態の変化にともなって顧客中心の地域的独占はゆるみ、消費は一般化していく。生産も近郊から遠心的にひろがり、保冷による屠体輸送技術にささえられて産地での屠体がはじまる。こうして米プラスアルファの商業的農業の進展にともなう産地の拡大、流通機構の変質のもとで産地問屋の成立条件が成熟し、産地仲買人や農協・生産者等で処理場を設けて消費地鶏肉商に屠体出荷をするものがあらわれる。しかし、処理・出荷の手数料はかならずしも有利なものではなく、経営採算上収益性の高い飼料販売の兼営がはじまり、また飼料商もブロイラー流通に進出する。こうして飼料販売を通じて産地問屋は経営基盤を確立し、農家に契約生産をひろげてゆく。飼育技術もまたいちじるしい進歩をみせ、アメリカからのブロイラー専用品種の導入とこれに適合した完全配合飼料の給飼、新薬品の導入を中心とする防疫技術や鶏舎構造の改良による大規模飼育方式へと進みだす。

一九六〇～六五年にかけてのこうした技術進歩は、巨大商社がブロイラー産業を掌握する手がかりでもあった。巨大商社は飼料穀物の輸入を独占し配合飼料メーカーの総代理店をつとめる立場から、増大するブロイラー飼料の需要をめざして産地問屋の飼料取り扱いの拡大と飼料商の産地問屋への転換を促進す

るとともに、新しい肉用原種鶏をアメリカから輸入し合弁会社の形で種鶏生産にも乗りだすことによって、技術進歩のポイントをなす素びな、配合飼料の独占的な供給者として産地問屋をエージェント化し、特約関係で飼育農家を広範に掌握していったのである。この結果、ブロイラーの生産性はたしかに向上するが、この成果は契約価格の引き下げと素びな代・飼料代の値上げで相殺されてしまい、契約価格の引き下げ、素びな・飼料価格の値上げという典型的なシェーレ現象のなかで、飼育農家は規模拡大に追い立てられてゆくのである。

こうして当初は消費地鶏肉商とのコネクションも十分でないままに、飼料の売り上げ増大を直接の契機としてブロイラー生産の増加をおしすすめたため、その結果としての周期的過剰生産（一九六四・六六年）は、契約価格の切り下げとしてふたたび生産者に押しつけられた。こうした矛盾を解決するため、やがて巨大商社はなんらかの形で消費地に手がかりをもとめ、ブロイラー出荷先の確保に乗りださなければならなくなる。インテグレーションは、巨大商社対産地問屋の局面から巨大商社対消費地鶏肉商の局面に転化する。

商社が介入して産地問屋と消費地鶏肉商との取引契約を促がしたり、商社系列下の冷蔵会社に生鳥や屠体の買い取り、処理・解体・冷凍保管を行なわせて鶏肉商に販売したり、新興消費地の食鳥問屋を組みこんで卸売センターにするといった形で系列化を図るが、最終小売り段階まではなかなか掌握できない。やがて小売り段階へのアプローチの契機となるのは、系列産地問屋の処理場を大型化してここで屠体の冷凍保管と解体も行なわせ、パーツ・正肉の形で冷凍車により消費地へ直送する方法が進んだことである。こうしてパーツ・正肉流通を掌握することにより、(1)関連食肉加工メーカーや食肉卸売会社を通じて一般精肉小売商への販売ルートにのせる、(2)系列スーパーストアその他のチェーンによる直営店の開設、(3)系列のホテル・レストラン等への大口業務用の納入、(4)鶏肉小売商のボランタリーチェーン化、等々の形で小売り段階をしだいに系列配下におさめることが可能になった。

しかし、このような鶏肉小売り過程へのアプローチは、まだ既存小売り機構を迂回し、むしろこれを外から包囲する作戦で進められている。みぎのようなアプローチを可能にした鶏肉消費の増大と大衆化は、同時に在来型の零細鶏肉小売商を増加・温存させる条件にもなっているからである。やがて鶏肉商の競争が激化して階層分解が進行し、店舗の大型化が要求されるとき、ひもつき資金援助という形で商社による系列化の正面攻撃がはじまり、インテグレーションはこれを組みこむことになろう。

いまひとつインテグレーションの完成にとって、ブロイラーの生産・供給の不安定性の克服という課題がある。巨大商社がこの課題とどのように取り組みつつあるか、それが第二章の現状分析の主要なテーマとなる。

以上、第一章の紹介にいささか紙数をとりすぎたきらいはあるが、この第一章の論述が本書をつらぬく基本的な論理構造を示すものとして、その大筋をまとめてみたのである。まさに著者のいう通り、「ブロイラー流通の展開は、巨大商社等を中核とするインテグレーションという新しい生産関係を生み出しつつあるが、それの完成は、わが国の畜産の基本的な生産関係をめぐる問題点と対立をあらわにし、同時に生産力構造の基盤に横たわる脆弱性を露呈していくことになるであろう」（六四頁）。

四

さて第二章は、ブロイラー生産の展開過程で生産技術の進歩とともに中小生産者の脱落が急速に進み、一九六五年以降産地がさらに拡散するなかで、いわゆる分解基軸はますます上昇し、規模拡大した一部専業農家が雇用労働を入れて、企業的な大規模生産に転ずるものがあらわれることを示す。六七～六八年以降新しく大羽数飼育をはじめる農家もみられ、また産地問屋の直営大規模生産、総合商社系の直営事業も登場するといった形で、ブロイラー生産は、年間一～五万羽出荷規模で一部を雇用にたよる大規模経営農家の契約飼育と、総合商社の子会社や産地問屋などによる資本主義的直営生産とによって担われるようになる。こうした総合商社系の直営生産の代表的なものが、三菱商事系列のジャパンファームＫＫ（鹿児島県）のブロイラー部門である。

しかし、ジャパンファームの場合も、月産六〇万羽という隔絶した規模をもちながら、その生産性・コスト水準では契約飼育農家に対する絶対的格差を実現しているわけではない。むしろ総合商社は、こうした直営生産とその併設流通施設を中核にしながら、契約飼育などで既存農家をもつつみこんでいく一種の「生産システム化」によって、インテグレーションの流通面からの要請に応えうる安定供給体制をつくろうとしているとみられる。また、こうした供給安定化の一方式として、契約飼育より一歩おしすすめた委託生産も試みられる。これは商社側が素びな・飼料・鶏舎設備等をいっさい提供し、農家は土地と裸の労働力を提供して飼育料を受け取り、事実上出来高払いの賃労働者になるものである。

みぎのような大規模生産の出現、生産システム化の進展とともに、インテグレーションをめざす流通機構の再編もすすむ。

すでに述べたような鶏肉小売商包囲作戦のなかで、とくにスーパーマーケットのチェーン組織がねらわれ、系列化が試みられる。いうまでもなく安定的高利潤の確保をめざすインテグレーションの目標は、ブロイラー価格を周期変動や季節変動の相場にまかせるのではなく、一定シェアの確保と製品差別化（ブランドの確立）により、一種の「管理価格」＝独占価格を実現することにある。そのためには小売り段階の系列化は必須の条件であり、その拠点としてスーパーマーケットがねらわれているのであって、総合商社・スーパーマーケット・鶏肉商の三者の間で、ブロイラーの取り扱いをめぐる角逐は今後いっそう激しさをますことになる。

かように、一方の極に資本制大規模直営生産と「システム化」された契約飼育、他方の極に系列化されたスーパーマーケットをおき、それを直結させてブロイラー価格の「管理価格」化を実現しようとする試みは、まだ十分には成功していない。これらはまだ、既存の機構組織に対して絶対的な優位を示すまでにいたっていないからである。そのことは逆にみると、契約飼育のなかでブロイラー生産から脱落するかどうかの瀬戸際にある中小規模農家も、生産と流通を独自に組織化することにより、とくに消費者や小売商との新しい結びつきを開発していくことによって、独自のコースを歩んでいく可能性があることを示しており、鶏肉商もこうしたコースをめざすなかで、とくに消費者運動と結びつきながら脱皮をはかっていくことが、総合商社のインテグレーションに対抗する道であるというのが著者の主張になっている。

第三章は、まず鶏卵の生産・流通の歴史的展開を概観し、ここでも一九五五年ごろを転機に、採卵鶏飼養経営の大規模化が産地の拡散をともないつつ進んだことを示す。そして、こうした展開がやはり、輸入穀物を原料とする配合飼料に依存した安易な規模拡大と生産性向上への道であり、奇型的畜産によって直面する農業構造問題を糊塗するものであったと指摘する。一九六五年以降こうした方向での規模拡大はさらに激化し、伊藤忠商事直営の岩手シーアイファームＫＫに代表されるような新しいタイプの経営もあらわれ、インテグレーションの拠点となっていく。これがスーパーマーケットに結びつき、プレミアム価格つきのブランド卵という形で「管理価格」を実現していこうとしているのである。

五

第四章は、みぎに個別的にみた巨大商社の農業インテグレーションをさらに総括的にとらえようとしている。その成立と展開から現状と方向におよび、巨大商社による食料品の生産・加

工・流通の再編成構想を解明したのち、巨大商社それ自体が戦後の従属的な国家独占資本主義に占める地位・役割についても概括的にふれることによって、農業部門への進出の背景を明らかにしようとするのである。

第五章は、最新の論稿で、一九七三年以降の空前の飼料値上げのもとでの畜産危機の性格と問題点を、養鶏産業を対象に解明している。もとよりこの危機は、飼料をほぼ全面的にアメリカに依存しながら展開してきた、わが国畜産の構造的特質がもたらす必然的な帰結にほかならないが、そうした構造的特質に根ざしながら、さらにそれを深化させることによって展開してきた総合商社のインテグレーションが、この危機をむしろ生産と小売りへの直接的進出の好機としてとらえ、組織化をさらに新しい段階におしすすめようとしていることを指摘、危機のもとで進みつつある再編過程がはらむ矛盾と可能性をさぐっている。

第六章は、わが国畜産をめぐる国際環境を、飼料穀物と各種畜産物について具体的に検討し、輸入自由化論のおとし穴を指摘した論稿であって、前章にみるような今日の危機的状況がはやくも著者の先見を立証したことになる。なお本章については、上述した『本誌』第二七巻第二号所収の書評でふれているので、それにゆずりたい。

以上、後半はかなりはしょった紹介になってしまったが、本書の意図するところはほぼ伝えることができたかと思う。最後に本書への若干の注文をつけて終わることにする。

ひとつは農協の問題である。分析の過程でしばしば農協や系統組織が顔をだすが、これまでの流通展開のなかでどのような役割と位置づけの評価をするのか、ほとんどふれられていないのは不満である。それは、今後の可能性におけるその位置づけ・役割の問題にもかかわってくるであろう。

いまひとつは政策の問題である。畜産における生産・流通の進展にかかわる政策・施策の展開にも、いますこし具体的にふれながらその役割の意義づけを述べてほしかった。とくに著者が、インテグレーションに関連して、「われわれは巨大商社において、最大限利潤を求める商業独占と、国家独占資本主義の政策体系の担い手という二重性格を見出す」（第五章、一四八頁）と述べているだけに、この前者の側面だけでなく、後者の側面についてもぜひ解明を進めてほしいのであり、御園氏との議論においても、この点がきわめて重要な論点になると思われる。そして、これもまた、今後の可能性における政策のありようといった問題にかかわってくるのである。

本書が、各章個別に発表された論文をまとめたものであるため、全体として十全に整理された論理構成をとりえず、叙述に

若干の重なりを避けえなかった反面、みぎのような点に十分ふれえなかったこともあると思われる。このような憾みはのこるが、畜産経済論・農産物市場論分野へのひとつの大きな寄与となった本書のメリットは、冒頭に評価した通りである。